

Title	ドゥルーズにおける「倒錯」の問題 : 1960年代におけるその展開と帰結
Author(s)	小倉, 拓也
Citation	年報人間科学. 2012, 33, p. 75-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6934
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈論文〉

ドゥルーズにおける「倒錯」の問題
—1960年代におけるその展開と帰結—

小倉 拓也

要旨

ドゥルーズは1940年代から1960年代にかけて「倒錯」の問題を論じている。倒錯の概念は、一見すると1970年代以降分裂症の概念にとって代わられてしまうかのように見えるが、それ自体還元不可能な独自性を持っており、ドゥルーズ哲学を貫く問題系をかたちづけている。

本稿では、『マゾッホとサド』（1967年）における二つの超越論的な企図であるサディズムとマゾヒズムを分析し、そのうちマゾヒズムを、あらゆる法や原理の彼岸を目指すサディズムに対するさらなる彼岸を開示するものとしてとりだす。ドゥルーズがマゾヒズムを特徴づけるメカニズムと考える「否認」と「排除」を、精神分析におけるそのプロブレマティックな地位に注目して詳細に検討することで、マゾヒズムが、サディズム的な超越論的な企図さえも退けて一切の組織化の原理の手前を目指すものであることが明らかとなるだろう。マゾヒズムとはこのような意味で「手前の彼岸」なのである。

そして、『意味の論理学』の動的発生論の読解を通じて、このようなマゾヒズム的倒錯の論理が、所与の破裂的で断片的で迫害的な対象関係をそっくりそのまま放棄するという仕方、で、「器官なき身体」を導出することが明らかにされるだろう。

キーワード

倒錯、否認、排除、器官なき身体

はじめに

本稿では、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズにおける「倒錯」概念をとりあげる。ドゥルーズにおける「倒錯」の概念は、1960年代、とりわけ『マゾッホとサド』（1967年）や『意味の論理学』（1969年）で重視されるものである。しかし、1970年代以降のフェリックス・ガタリとの共同作業による「分裂症」概念の前面化によって、「倒錯」そのものはドゥルーズの思想において背景に退いたかのようにも見える。さらに、1960年代に「倒錯」のパラダイムにおいて考えられていたマゾヒズムが、『千のプラトー』（1980年）においては、「器官なき身体」を獲得するプログラムとして論じられることになる。これは一見すると、「倒錯」を非物的な「表面」の領野に位置づけ、「器官なき身体」を「深層」の領野に位置づけていた『意味の論理学』の図式と、大きな齟齬をきたすようにも思える。本稿の目的は、これら紆余曲折ないしはと

きに矛盾するようにも見えるドゥルーズにおける「倒錯」の地位を一貫して理解し、それがドゥルーズの思想全体において持つ射程と意義を測定することである。

以下ではまず、ドゥルーズにおいて「倒錯」が持つコンテクストを明らかにする。ドゥルーズにおける「倒錯」は、1940年代から1960年代まで「他者」の問題とともに述べられており、そのことが「倒錯」の理解にとって不可欠だからである。次いで、『マゾッホとサド』におけるサディズムとマゾヒズムの峻別について確認する。本稿の考えでは、サディズムから区別される限りでのマゾヒズムが提起する問題が、ドゥルーズにおける「倒錯」の考え方にとって重要な寄与をなしているのである。こうした作業をとおして、われわれは『意味の論理学』の中に、「倒錯」の問題が同じ論理で導きだす、二つの真逆のベクトルの帰結を見ることになるだろう。そこから、前期ドゥルーズの倒錯論がドゥルーズ哲学全体において持つ射程を明らかにすることができる。

1 「倒錯」のコンテクスト——他者の「排除」

まずは簡単に、ドゥルーズにおける「倒錯」のコンテクストを確認しておこう。

ドゥルーズは1940年代に、現象学的な言葉づかいで「他者」と「倒錯」を主題とした二つの小論を著わしている⁽¹⁾。この他者論と倒錯論は、そのモチーフをほぼ維持したかたちで、1960年代に構造主義、とりわけラカンの精神分析理論の影響のもとでさらに展開されることになる。その集大成的な論考である、『意味の論理学』に所収された「ミシェル・トゥルニエと他者なき世界」では、「他者」が、私の知覚野や欲望の組織化を条件づける「可能的なものの構造」と定義される⁽²⁾。「他者」は、具体的な何者かであるよりも先に、世界における可能なパースペクティヴ、すなわち可能世界を表現することで、奥行と横幅の可換的な知覚経験や、欲望の方向づけにおいて、ア・プリオリなカテゴリーとして機能するひとつの「構造」なのである⁽³⁾。

これに対して「倒錯」は、そのような可能的なものの構造がない世界で、すなわち可能的なもののカテゴリーを超えた、というよりその手前で、知覚経験や欲望の変容として論じられる。ドゥルーズはこうした事態を、ラカンの用語で「他者の『排除』」(la « forclusion » d'autrui)と呼んでいる⁽⁴⁾。ここに見いだされるのは、われわれの経験や欲望を条件づけているものの手前にまで遡行するという超越論的な動機である。このように、「倒錯」を「他者」とその「排除」の関係において捉える発想は、言葉づかいこそ現象学的なものから精神分析的なものへと変わっているものの、1940年代から一貫したものであり、われわれがドゥルーズにおける「倒錯」の問題を考えるうえで、ひとつの準拠となるはずである⁽⁵⁾。以下で論じるサディズムとマゾヒズム、そしてそれらの特徴である「否定」や「否認」や「排除」というメカニズムも、こうしたコンテクストにおいて理解されなければならない。

2 否定、否認、排除

「倒錯」の問題を、サディズムとマゾヒズムに関するドゥルーズの議論から考えよう。ドゥルーズは『マ

『ゾッホとサド』において、「倒錯」についての「偉大な臨床家」として、サドとマゾッホを論じている。「サド＝マゾヒズム」という単位性、その相互補完性を当然のものと思ふ当代の「変換論」に対して、ドゥルーズは両者を切り離そうとする。本稿の考えでは、その中でマゾヒズムに与えられる諸特徴が、『マゾッホとサド』だけでなく、『意味の論理学』およびその後の著作におけるドゥルーズの「倒錯」概念全体にとって重要な意義を持っていると思われるのである。

では、両者はいかに峻別されるのだろうか。ドゥルーズによる両者の分析は小説技法、バッハオーフェンを援用した特異な人類学、ユーモアとアイロニーの観点から論じられる法哲学にまで多岐にわたるものなので、ここでそのすべてを扱うことはできない。本稿では、両者を特徴づける二つの概念、すなわち「否定 [négation]」と「否認 [dénégation]」にまずは注目し、その精神分析的な含意に焦点を当てながら確認していこう。いずれの概念においても、問題となっているのは、所与の自然や法に対する超越論的な原理を見いだすことである。

2 - 1 サディズムと否定

サドの文学で問われているのは、「否定のあらゆる広がり」と「深度」⁽⁶⁾であり、この問いは二つの「自然」の区別にもとづいている。ひとつが「二義的自然」である。二義的自然は、それ自身の規律と法則に従属した自然であり、そこではいかなる否定性も、すでに存在する秩序の中での否定にすぎず、いわば秩序そのものの追認でしかない。もうひとつが、「本義的自然」である。本義的自然は、「類や法則を超えた純粹否定の代弁者」(PSM 25)であり、あらゆる秩序の要請からも自由な原初のカオスと考えられる。これは一切の経験則を超えるものと考えられるので、「〈理念〉の対象」(PSM 25)でなければならない。

この自然の区別の論理は、ドゥルーズのフロイト解釈と対応している。よく知られているように、フロイトは『快原理の彼岸』(1920年)で「生の欲動」と「死の欲動」という対を導入した。フロイトの理論においては、死の欲動はそれ自体経験的ないし実体的に捉えられることはなく、生の欲動との混合状態においてしか見いだされえない。それゆえ、死の欲動そのものは思弁的なものなのである。しかしドゥルーズは、生の欲動との混合状態から考えられてしまう死の欲動は、あくまで快原理という経験則に従属したものにすぎないと論難する。こういってよければ、ドゥルーズにとってフロイトのいう死の欲動は十分には思弁的でないのである。そこでドゥルーズは、「生の欲動 - 死の欲動」という共犯関係にある対そのものに対して、さらなる「彼岸」を、真に「超越論的な」ものとして対峙させる。それは、快原理との共犯や経験的なものの残滓を残してしまう「欲動」という言葉を排して、「死の本能 [l'instinct de mort]」(PSM 28)と呼ばれる。

このように、「本義的自然」と「死の本能」が要請される論理に見られるように、一切の経験則を超えた「否定」の原理を追求するのが、サドにおける「純粹否定」の試みなのである。これに対して、マゾッホの試みは、同じく既存の自然や法に対する超越論的なものをめぐる探究なのだが、まったく別の操作によって特徴づけられる。

2 - 2 マゾヒズムと否認

サドの「否定」に対してマゾッホに見いだされるのが「否認」である。「否認」と「否定」は「まったく異なる操作」だと述べられる。

[……] 否認を、否定することや、あるいは破壊することでさえなく、むしろ、一種の宙づりや中性化の操作の出発点として理解すべきだろう。この宙づりや中性化は、現にそうであること [ce qui est] の正当化に反逆し、与えられたものの彼方に、与えられたものではない新たな地平をわれわれに開示することをその特徴とする。(PSM 28)

正確に言えば、「否認」は、所与の何もかを否定するのでも、それを超えようとするのでもない。そもそもそんなものを認めないのである。ドゥルーズのいわんとすることをより正確に理解するために、精神分析における「否認」概念について簡潔に注解しておこう⁽⁷⁾。

フロイトが「否認」を見いだすのは、倒錯、とりわけフェティシズムにおいてである。フロイト精神分析の考えでは、普通子ども（男の子）は、女性（母）にペニスがない事実を知覚し、そこに去勢の痕跡を見いだすと考えられる。この事実の知覚は、去勢不安を引き起こすことで、人間主体の形成や性別の引き受けにとって決定的な役割を担う。また、ラカンによれば、〈母〉における欠如の発見は、幼児にその欠如を自分でも母でもない第三項（〈父の名〉）によって正しく名づけること（父性隠喩）を要請し、そこに言語活動へと主体が開かれる可能性が賭けられる⁽⁸⁾。

「否認」が問題となるのは、こうした人間主体の形成や欲望の組織化の過程における最初期段階、すなわち「女性におけるペニスの不在」あるいは「〈母〉における欠如」という事実の知覚においてであり、「否認」されるのはまさにそうした事実そのものである。この不在ないし欠如を認めず、それを隠蔽するようにフェティッシュを「幻想」として形成するのが、倒錯としてのフェティシズムである⁽⁹⁾。

ドゥルーズもまた、「否認」の例としてフェティシズムを挙げ、フェティシズムが本質的にマゾヒズムに属すとし、「本義的なフェティシズムなしにはマゾヒズムは存在しえない」とまで強調する(PSM 30)⁽¹⁰⁾。不在ないし欠如という事実の知覚が、人間主体の形成と欲望の組織化の端緒にあってそれを基礎づけるのに対して、フェティシズムとしてのマゾヒズムは、「否認」によって、その事実を宙づりにし、中性化し、「幻想」を形成することで、「現実的なものに対して理想的なものの権利を主張する」(PSM 30)のである。このような「否認」のメカニズムは、精神分析の公準たる快原理にもその作用を及ぼす。ドゥルーズは次のように述べている。

マゾヒズム的否認の過程はきわめて遠くまで進行するので、それは性的快楽そのものまで対象とする。快楽は、最大限遅延させられ、否認によって打撃を受ける。そしてその否認は、快楽が経験されるまさにその瞬間、マゾヒストに現実を否認させ、「新たな無性的人間」へと自らを同一化させる。(PSM 31)

このように、サドの「純粹否定」とは別に、マゾッホにおける「否認」が、快原理を宙づりにすることでその「彼岸」を開示するものとして取りだされるのである。

こうして、サディズムとマゾヒズムとに固有な二つの超越論的な原理が整理される。一方は「純粹否定」であり、それは累積的で加速的な破壊をその特徴とし、二義的自然を超克しようとするものである。他方は「否認」であり、宙づりと停止をその特徴とし、現実の要請する所与としての事実をそもそも拒絶する。これら（サド的累積性とマゾッホ的停止性）が、快原理という経験則が原則たるための、形式としての純粹な「反復」の二つのかたちであり、そこで快樂への指向はこの「反復」を前にしたひとつの態度にすぎないものとなる（PSM 104）。すなわち、形式としての「反復」そのものが快樂から自律するのである。

2 - 3 「排除」概念が示す「否認」の含意

ここまでで、サドとマゾッホのいずれにおいても、快原理に対する超越論的なものが見いだされた。しかし、両者における〈父〉の問題に触れることで、ドゥルーズはマゾヒズムのさらなる特徴を描きだす。

ドゥルーズによると、「父のイメージは、サディズムにおいて決定的である」（PSM 50）。サドにおいて家族という「二義的自然」を破壊し超克するのはつねに〈父〉の暴力なのである。そして、マゾヒズムをサディズムの単なる反転と考える「変換論」は、マゾヒズムにおいても〈父〉が決定的な役割を担っていると考える（「殴るのはあくまで父である……」）。しかし、「変換論」を退け両者を峻別するドゥルーズによれば、マゾヒズムにおいては「父は排除され、無効にされている」（PSM 54）という。ここでドゥルーズは、マゾヒズムに「否認」だけでなく「排除 [forclusion]」⁽¹¹⁾のメカニズムをも認めているのである。この「排除」概念は、『マゾッホとサド』において、サディズム的な破壊性に対する批判的な示唆を含んでいるので、これを単なる言葉上の問題として済ますわけにはいかない。その含意を汲みとるために、ここでも精神分析におけるその地位について簡潔に注解しておこう。

精神分析においては、「否認」と「排除」はそれぞれ倒錯と精神病のメカニズムとされ、区別されるべきものである⁽¹²⁾。とはいえ、それを理由にドゥルーズが単純な混同を犯しているといってみても何の意味もないだろう。むしろ問うべきなのは、「否認」と「排除」とが共通して提起する問題とは何か、ということである。ここにこそ、サディズムに対するマゾヒズム固有の持ち分があると考えられる。では、精神分析における「排除」とはいかなるものなのか。

「排除」の概念が精神分析において持つ意義はきわめて重いものである。「排除」とは、フロイトが精神病のメカニズムとして見いだした「棄却 [Verwerfung]」をラカンが概念化したものであり、神経症を形成する「抑圧」や、その中で見られる「否定」とはまったく異なるものである。ラカンによれば、「排除」は、〈母〉における欠如を名づける〈父の名〉を拒絶することであり、換言すれば、それが是認されなければ象徴化の過程すべてが不可能になる「原初的シニフィアン」の排除を意味するのである⁽¹³⁾。（ちなみにこの原初的シニフィアンの是認こそが「抑圧」であり、「否定」は抑圧を前提とするので、抑圧の体制を転覆するのではなく追認する。）

さて、症例分類を至上の課題とせず、その内実に迫ろうとするなら、「否認」と「排除」が同じひとつ

の問題を共有していることが分かる。「否認」とは、すでに確認したとおり、「〈母〉における欠如」という事実の知覚を否認することであった。このことは、精神分析理論にとって、きわめてプロブレマティックなものである。たとえばラランシュとポンタリスは、「排除」について論じている箇所、フロイトの概念体系において「排除」と「否認」が持つ機能上の親近性を示唆しながら、次のように述べている。

幼児やフェティシストや精神病者による、女性にペニスがないという「現実」への否認は、「知覚」そのものを容認しないこと、そしてそれゆえになおさら [a fortiori]、その知覚から生じる結論、つまり去勢という「幼児の性理論」を引き受けないことだと考えられる。(14)

さらに、「否認」について論じている箇所では、逆に「排除」への参照を促しながら次のように述べられる。

もし否認されるのが女性の「ペニスの欠如」であるなら [……] 否認は、仮説的な「知覚的事実」よりも、むしろ、人間的現実の最初の基盤となる要素に関係するのではないか。(15)

このように、事実の知覚の「否認」は、単にそれだけのことでなく、事実の知覚に引き続く過程とその結果をも拒否することであり、そのことは去勢にもとづく性理論そのものを問いに付すことになる。精神分析はそれを重度の病と見なすかもしれないが、去勢の論理とは別様の主体や身体や欲望の論理がありうるのである。この点において、「否認」と「排除」は、精神分析理論の内部にあってひとつの論点を共有しているのである。

ここに、「否認」と「排除」をその特徴とするマゾヒズムが、サディズムに対して持つ意義が存すると考えられる。サドとマゾッホの試みは、両者とも、それぞれの仕方で快原理に対する超越論的なものを見いだすものであった。しかし、ドゥルーズが述べているように、サドの試みは、「否定的な欲動や部分的破壊の運動を倍加し、濃度を増すことによってしか、それをなすことができない」(PSM 28)。すなわち、「純粹否定」の試みは、「本能」ではなく「欲動」を、そして「部分的」でしかない破壊をひたすら加速し純化することによってのみ遂行されうるという意味で、どこまでも経験的なものの残滓を残してしまうのである。そこで目指される「本義的自然」という「〈理念〉の対象」は、いわば到達不可能な不在のゼロ点なのであり、サディズムの純粹否定はそれをめぐって空点し続ける際限のない試みとなる。ドゥルーズは、サドにおけるこのような否定的破壊を「運動 [mouvement]」と呼んでいるが、マゾッホにあってはまさにその「運動」そのものが放棄される (PSM 62)。こういってよければ、「純粹否定」が「二義的自然」に対して「本義的自然」を要請するのと同じその超越論的な動機から、「否認」は「純粹否定」のさらなる「彼岸」を、しかも人間主体の形成や欲望の組織化のプロセスの手前に開示しようとするのである。「否認」と「排除」が提起するのは、このような手前の彼岸なのである (16)。

3 『意味の論理学』における「倒錯」の展開と帰結

ここまでドゥルーズにおけるサディズムとマゾヒズムの峻別を見てきた。その中でわれわれは、サディズムに対するマゾヒズムの持ち分を強調した⁽¹⁷⁾。では、このようなマゾヒズムの特徴は、ドゥルーズにおける「倒錯」の問題にどのように寄与しているのだろうか。

アンヌ・ソヴァニャルグの興味深い指摘によると、『マゾッホとサド』は、「侵犯に対する批判を暗に含んでいる」⁽¹⁸⁾という。彼女によれば、当時のフランス思想における「倒錯」の地位は、バタイユのサド解釈の大きな影響のもと、もっぱら「侵犯」にあつたらしい。ドゥルーズの分析においても、サディズムに固有の「否定」は、既存の法や自然を純粹に破壊し超克しようとするものであり、そこには明白に「侵犯」の論理が見てとれる。しかし、マゾヒズムをサディズムから分離することによって、倒錯についての考え方が根本的に変わることになる。ドゥルーズが『意味の論理学』において、「倒錯と呼ばれるのは、厳密には、身体における客観的な戸惑いの力能である」(LS 326)と述べているように、いまや「倒錯」によって問題とされるのは、既存の何ものかを破壊し侵犯することではなく、「組織化の原理に先立つ身体の差異化」⁽¹⁹⁾なのである。

このような「倒錯」の解釈は、われわれが『マゾッホとサド』に見いだしたマゾヒズムの持ち分と軌を同じくしており、『意味の論理学』における「倒錯」概念へとつながっていくものである。以下で、『意味の論理学』の動的発生論に、われわれが『マゾッホとサド』で見いだした「倒錯」の論理の展開と、二つの真逆のベクトルを持つ帰結について論じよう。

3 - 1 第一の帰結：表面の倒錯論

すでに言及したとおり、『マゾッホとサド』では、「否認」の宙づりと中性化が「現実的なものに対して理想的なものの権利を主張する」(PSM 30)と述べられていた。ここでドゥルーズがいう「現実的なもの」とは、受け容れるべき所与の事実のことであるが⁽²⁰⁾、それだけでなく、〈父〉の暴力の「排除」の議論から分かるように、所与の事実に対する際限のないサディズム的破壊の企図をも含むものである。それに対して「理想的なもの」とは、欠如を認めないフェティシズム的「幻想」であり、また、〈父〉の暴力（つまりサディズム的破壊）を排除するものであった。

これと同じ論理が、『意味の論理学』の動的発生論に見いだされるのである。ドゥルーズは動的発生論で、メラニー・クラインの用語を採用しながら、原初的な攻撃性の投影と取り入れからなる破壊的な深層の身体の領野から幼児が離脱する過程を描いている。ドゥルーズが述べているとおり（というかクラインにおいてそうなのだが）、この破壊的な深層の身体の領野にサディズムが存する（LS 224）。そして、この深層からの離脱は、高所の理想的な「善き対象」への同一化によって遂行される。この「善き対象」とは、一切の欠如を持たない「完全なもの [le complet]」であり、この欠如なき完全さへの志向にマゾヒズムが存するとされる（LS 224）。

しかし、理想的で完全なものは、理想的で完全なものである以上、原理的に接近不可能なものであ

る。それゆえ、これを希求する幼児の企図は必ずや挫折する。しかし幼児は、この耐え難い現実を「否認[dénégation]」(LS 242)することで、「幻想」を形成し、それを生きることで、物的現実の次元とそこでの破壊衝動から離脱し、「非物的なもの」の領野を手にするようになる⁽²¹⁾。動的発生論の複雑な構成については別途詳細に整理する必要があるだろうが、ここでは、上記のように、深層の破壊衝動から離脱しようとする企図こそが、『マゾッホとサド』から直接的に帰結する『意味の論理学』における「倒錯」のひとつのあり方であるということを強調しておこう。

ところで、このような、「幻想」によって「非物的なもの」の領野を開く「否認」は、深層の破壊衝動を脱性化し、象徴化し、昇華する方向へと向かうものである(LS 242-243)。しかし、マゾヒズム的「否認」の論理が見いだされるのは、ここだけではない。動的発生論においては、現実を拒絶する、より根源的な仕方が描かれており、そこにわれわれが確認してきた「倒錯」の徹底した帰結が見いだされる。

3 - 2 第二の帰結：対象関係の放棄による「器官なき身体」の導出

動的発生の出発点は、統合を知ることのない幼児の「寸断された身体」と、同じく統合を見ない部分対象の世界である。この段階の対象関係は、幼児の原初的な攻撃性によって構成されており、一切が迫害的な「恐怖の劇場」(LS 218)である。ドゥルーズが依拠するクラインの対象関係論によれば、対象の迫害性は、幼児の原初的な攻撃性や破壊衝動の投影である。だから、幼児がこの耐え難い迫害的な対象関係を自身の攻撃性によって破壊しようとしても、それはますます攻撃性を投影することになり、対象の迫害性をひたすら増幅させるだけである。クラインの言葉を借りるなら、幼児が生きるのは「サディズムと不安との漸進的な相克」⁽²²⁾であり、所与のすべてを破壊し尽くそうとする幼児のサディズム的な企図は、ここでも、不在のゼロ点に向けられた際限のない試みとなる⁽²³⁾。

このように、深層の取り入れ - 投影のシステムにおいては、無傷で済むものは何もない。また、そうである以上、クラインが想定したように、迫害性を緩和する同一化の対象である「善き対象」がこの段階に所与として与えられるとも考えられない。したがって、この迫害的な対象関係から純粋に離脱することができる唯一の方策は、「一切の取り入れと投影を放棄すること」(LS 220)である。

取り入れられ投影される、毒性で排泄的で、口唇的で肛門的な悪しき部分対象に対して分裂ポジションが対立させるのは、部分的な善き対象そのものではない。むしろ、一切の取り入れと投影を放棄することによって完全なものとなった、口も肛門もない、部分なきひとつの有機体、器官なきひとつの身体である。(LS 220)

注意しなければならないが、「器官なき身体」は、破壊的な深層の身体を特徴づける「寸断された身体」と同じものではない⁽²⁴⁾。「寸断された身体」とは、幼児が誕生とともに生きはじめる「全体なき諸部分」であり、ここにはいかなる完全なる全体性のイメージも与えられていない。この全体性のイメージすなわち「諸部分なき全体」の原型となるのが「器官なき身体」であり、それは「全体なき諸部分」だけの状態

から、何らかの仕方で見いだされなければならない。動的発生論の記述では、「器官なき身体」が見いだされるのは、幼児が、攻撃性の投影と取り入れからなる迫害的な対象関係そのものを放棄するとき、すなわち、生まれなかったことにすることで迫害的な現実をそっくりそのまま「否認」するときなのである⁽²⁵⁾。これが、われわれが追ってきた「倒錯」の論理を徹底して辿りつく、もうひとつの帰結である。

『意味の論理学』における「器官なき身体」の導出は、「非物体的なもの」へと向かう幻想の理論、すなわち表面の倒錯論とは真逆のベクトルのものである。しかし、耐え難い現実の「否認」によって深層の破壊衝動から離脱し、「理想的なもの」を希求するという点で、両者とも明らかに、マゾヒズム的な「倒錯」の論理によって導かれている。とりわけ、クラインの考える原初的な攻撃性の投影と取り入れの世界が、迫害的な現実を破壊しようとしてますます迫害性を増強するという、不在のゼロ点に向けられた際限のないサディズム的企図である以上、そのようなサディズム的企図そのものを放棄するという「器官なき身体」の論理は、『マゾッホとサド』でわれわれが見いだした、一切の組織化の原理の手前へと向かうマゾヒズム的な「倒錯」の論理そのものの帰結であるといえる。

おわりに

以上、『マゾッホとサド』から『意味の論理学』へと「倒錯」の問題を追ってきた。では、このような「倒錯」の問題は、その後のドゥルーズの理論的展開において、いったいいかなる意義を持つのだろうか。

たとえば、ドゥルーズとガタリは、『千のプラトー』において、身体のあらゆる穴を塞ぐようなマゾヒズムが、「器官なき身体」を獲得するためのプログラムであり、そこに「幻想」など微塵もないと述べている⁽²⁶⁾。一見すると『意味の論理学』の表面の倒錯論を全否定するようなこうした議論も、いまや、われわれが確認してきた「倒錯」の論理の徹底化として理解することができるだろう。

また、本稿で言及したとおり、『マゾッホとサド』において「否認」は「運動の放棄」とも定義されていた。ドゥルーズ自身はこれを「『写真的な』場面」(PSM 31)と呼んでいるが、トーマス・ゲイスケンが「映画的手続き」⁽²⁷⁾と形容しているように、事実の知覚と運動を放棄する「否認」は、「純粋に光学的で音声的な状況」を論じる後期の映画論を間違いなく想起させるものである。

ドゥルーズの理論的変遷を見ると、このような「倒錯」の論理が1970年代以降に分裂症化されていくというのは、確かに事実ではある。しかし、本稿で論じたように、「倒錯」の問題はドゥルーズにおいて分裂症よりはるかに古い歴史を持っており、単に1970年代に放棄されたわけではなく、様々な点において前期から後期へとドゥルーズの思想全体に通低するテーマをかたちづけているのである。

註

(1) これらは現在英語版しか手に入らない状況にある。本稿でも英語版を参照している。Gilles Deleuze, "Description of Woman: for a Philosophy of the Sexed Other", Keith W. Faulkner (trans), in *Angelaki*, vol.7, no.3, Routledge, 2002; Gilles

- Deleuze, "Statement and Profiles", Keith W. Faulkner (trans), in *Angelaki*, vol.8, no.3, Routledge, 2003.
- (2) Gilles Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969, p.357. 以下本書への参照は略号 LS と頁数で示す。
- (3) ドゥルーズの他者論そのものについては別の場所で論じているので、詳細についてはそちらを参照。小倉拓也「ドゥルーズ哲学における「他者」の問題」『フランス哲学・思想研究』（第16号）、日仏哲学会、2011年。
- (4) 「ラカンのようにいうなら、他者の『排除』によって、他者はもはや他者として把握されなくなる。というのも、他者にその場所と機能を与えることができる構造が欠けるからである」（LS 359）。
- (5) たとえば1940年代には、「他者」は、サルトルの対他存在の議論を念頭に「可能世界の表現」と定義され、「他者」の表現する可能世界に参加することで共同主観的な世界が可能となるとされていた（Gilles Deleuze, "Description of Woman", *op.cit.*, p.17）。それに対して「倒錯」は、このような他者との共同から外れて生きる実存様態として規定されていた（Gilles Deleuze, "Statement and Profiles", *op.cit.*, p.88）。
- (6) Gilles Deleuze, *Présentation de Sacher-Masoch*, Minuit, 1967, p.24. 以下本書への参照は略号 PSM と頁数で示す。
- (7) 以下フロイトの著作は Sigmund Freud, *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, James Strachey (trans. and ed.), Hogarth Press を用い、略号 SE と巻数と頁数で示す。
- (8) Jacques Lacan, *Le séminaire, livre V: Les formations de l'inconscient, 1957-1958*, Jacques-Alain Miller (ed.), Seuil, 1998, p.161ff. また、「父の名」と父性隠喩についての理解は以下の研究に多くを負っている。Bruce Fink, *The Lacanian Subject: Between Language and Jouissance*, Princeton University Press, 1995, pp.53-58.
- (9) 「より明確に述べれば、フェティシズムの対象は女性（すなわち母）のペニスの代理であり、子どもはそれがあると信じ、諦めようとしなない [……] 子どものナルシズムが、去勢という事実を認めることに抵抗するのである」（SE XXI, pp.152-153）。
- (10) たしかに「否認」はフェティシズムに見いだされるメカニズムであり、その点でドゥルーズは正しいのだが、なぜそれがマゾヒズムにも当てはめられるのかに関するドゥルーズの論旨は、明らかなものとはいえない。これについては千葉雅也が踏み込んだ指摘を行っている（千葉雅也「彼岸のエコノミー——ドゥルーズ『マゾッホ紹介』再読：デリダ、マラーのフロイト解釈と比較しつつ」『現代思想』（第36巻第15号）、青土社、2008年、154頁）。
- (11) 『マゾッホとサド』の本文中では、ドゥルーズは *exclure* ないし *supprimer* という動詞を用いているが、参照先にラカンを指示し、そこで *forclusion* と明記している（PSM 57, note 17）。もっとも、ラカンにおいても、用語として *forclusion* が定着するまでには時間を要しており、しばしば *rejet* や *exclusion* という名詞が用いられている（Cf. Jacques Lacan, *Le séminaire, livre III: Les psychoses, 1955-1956*, Jacques-Alain Miller (ed.), Seuil, 1981）。
- (12) とりわけラカンの注釈者たちは神経症、倒錯、精神病を構造論的にカテゴリー化しようとするので、対応するメカニズムである抑圧、否認、排除ははっきりと区別される。以下を参照。ブルース・フィンク『臨床ラカン派精神分析入門——理論と技法』中西之信、椿田貴史、舟木徹男、信友建志訳、誠信書房、2008年、113頁。しかし、フロイトが晩年の「神経症と精神病の現実喪失」（1924年）において認めているように、否認は倒錯だけでなく精神病にも関わるものであり、単純な症例分類を退けるものである（SE XIX, p.184）。
- (13) 「私が排除というとき [……] 問題となっているのは、原初的なシニフィアンを外部の闇へと廃棄することである。シニフィアンは、それ以降、その水準を欠くことになる。[……] 問題となっているのは、根源的な内部からの、すなわち [物理的] 身体内部ではなく、シニフィアンという第一の基軸の内部からの除外の過程である」（Jacques Lacan, *Le séminaire, livre III, op.cit.*, p.171）。
- (14) Jean Laplanche et J.-B. Pontalis, *Vocabulaire de la psychanalyse*, PUF, 2007 [1967], p.165. 強調原文。
- (15) *Ibid.*, p.116. 強調原文。
- (16) これを、超越論的な企図そのものに対する彼岸という強い意味でとれば、「内在」の議論につながるのかもしれない。本稿ではマゾヒズムと「内在」の問題について直接は触れないが、第3節で『意味の論理学』の動的発生論における「器官なき身体」について論じ、最後に『千のプラトール』におけるマゾヒズムの問題に言及している。そこからマゾヒ

ズムと「内在」の問題へと向かうこともできるだろう。

(17) このような『マゾッホとサド』の「マゾヒズム優位」の読解に対しては、千葉雅也による批判がある（千葉雅也「彼岸のエコノミー」、前掲書、151頁）。

(18) Anne Sauvagnargues, *Deleuze et l'art*, PUF, 2005, p.50. 強調引用。

(19) *Ibid.*, p.51. 強調引用。また、「侵犯」と「贈与」をめぐるバタイユに対するドゥルーズのアンビヴァレントな態度については、Eduard Viveiros de Castro, "Intensive Filiation and Demonic Alliance", in *Deleuzian Intersections: Science, Technology, Anthropology*, Casper Bruun Jensen and Kjetil Rdje (ed.), Berghahn Books, 2009, p.247, note 29 を参照。

(20) ここで、1960年代のドゥルーズにおける「現実的なもの [le réel]」の地位について注記しておこう。周知のとおり、ラカンは「現実性 [réalité]」と「現実的なもの」とを区別した。前者がフロイトのいう「現実原理」の意味における現実、すなわちわれわれがそれに従うべき現実であるのに対して、後者はカントのいう「物自体」に似た、われわれが把握することも到達することもできない「不可能なもの」としての現実である (cf. Bruce Fink, *The Lacanian Subject*, op.cit., p.25)。ドゥルーズとガタリの『アンチ・オイディプス』はこの点を踏襲して「現実的なもの」という言葉を用いているが、1960年代のドゥルーズは少し異なる用語法で用いている。

本稿で確認してきたように、ドゥルーズは1967年の『マゾッホとサド』において、「現実的なもの」を、マゾヒストが「否認」しそれに対して「理想的なもの」の権利要求をするような、所与の事実と考えている。ここでドゥルーズは、「現実的なもの」を「現実性」に近い意味で用いているように思える。このような解釈を裏づけるのが、同じく1967年に執筆され、フランソワ・シャトレの編纂する『哲学史』の一部として1972年に出版された「何を構造主義として認めるか」である。ここでドゥルーズは「象徴的なもの」を構造主義を規定する第一の基準としているが、それに対して、「現実的なもの」と「想像的なもの」の例として、フロイトに言及しつつ、「失望させる力を持つ現実原理と、幻覚的に満足させる力能を持つ快原理」(Gilles Deleuze, « A quio reconnaît-on le structuralisme ? », in *L'île déserte et autres textes. Textes et entretiens 1953-1974*, Minuit, 2002, p.240) と説明している。このことから、1967年の時点でドゥルーズが「現実的なもの」を「現実性」に近い意味で用いていることは明らかだといえるだろう。

1969年の『意味の論理学』では、事態は少々込み入っている。『意味の論理学』はストア派に由来する「物的なもの」と「非物的なもの」との二元論を採用しており、これらがそれぞれ「現実的なもの」と「象徴的なもの」に該当する。問題なのは、「非物的 - 象徴的なもの」が「第二の組織化」とも呼ばれる一方で、「物的 - 現実的なもの」が、体系上異なる二つの位相、すなわち、実現された事物の状態であり、分節され命題において語られるような現実性の領野である「第三の配置」と、いまだ言葉を解さない幼児の原初的な深層の身体の領野である「第一の秩序」へと分かれている点である。これらは、体系上異なる位相であるにもかかわらず、ともに「物的」であり、それゆえ「現実的 [réel]」とされる。このことは、実現された事物の状態 (第三の配置) から非物的な領野 (第二の組織化) を回復する「反 - 実現 [contre-effectuation]」と呼ばれる操作が、第一の秩序から第二の組織化へと向かう動的発生についてもいわれていることからも裏づけられるだろう (LS 247)。『意味の論理学』において、ドゥルーズがしばしば「物的なもの」のカテゴリーのもとに「第三の配置」と「第一の秩序」の内容を区別せずに記述しているという印象は拭えない。

以上の分析を根拠に、本稿ではドゥルーズにおける「現実的なもの」をもっぱら「現実性」に近い意味で、そして『意味の論理学』においては、いずれも物的なものの領野であるという理由で「第三の配置」と「第一の秩序」の両方に当たるものとして解釈する。

(21) 「有名な『否認』のメカニズムは [……] 思考の形成にとって重要であり、それゆえある表面 [身体表面]」から別の表面 [形而上学的表面] への移行を表現するものとして解釈されなければならない (LS 242)。「幻想は非物的なものを構成する過程である」(LS 256)。

(22) Melanie Klein, *The Psychoanalysis of Children*, Vintage Classics, 1997 [1932], p.140.

(23) 「サディズムは、自身が課す苦痛においてだけではなく、攻撃性の投影と取り入れによって自身に課される苦痛に

おいても、分裂ポジションに依存している」(LS 224)。

- (24) 「寸断された身体」と「器官なき身体」との差異について注記しておこう。ドゥルーズは『意味の論理学』第13セリー「分裂症者と少女」において、それまでの議論を導いてきたルイス・キャロルの「表面」の論理学を転覆するかのように、突如、アントナン・アルトーに言及しつつ分裂症的な「深層」を記述しはじめる。しかしこれを「表面 - 深層」という二項的図式で理解するだけでは不十分である。ドゥルーズはここで、深層そのものの二元性について明確に言及しているからである。すなわち、表面と深層だけでなく、二つの深層が区別されているのである。それは、「寸断された身体を受動性」と「諸部分なき身体の能動」(LS 110)であり、前者が破裂的な断片性であるのに対して、後者は一切を溶解してひとつにする流体的性として特徴づけられる。この区別において問題となっているのは「全体なき諸部分」と「諸部分なき全体」との還元不可能な差異である。この区別は、動的発生論においても確認されており (LS 220, note 3)、本稿では『マゾッホとサド』と動的発生論の記述から、前者にサディズムのメカニズムを、後者にマゾヒズムのメカニズムを見いだしている。
- (25) クラインは、単に個々の対象の放棄だけでなく、対象関係そのものの放棄についても言及しており、それを「否認 [denial]」と呼んでいる。Melanie Klein, “Notes on Some Schizoid Mechanisms”, in *Envy and Gratitude*, Vintage Classics, 1997 [1957], p.7.
- (26) Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Mille Plateaux, capitalisme et schizophrénie 2*, Minuit, 1980, p.188.
- (27) Tomas Geysken, “Literature as Symptomatology: Gilles Deleuze on Sacher-Masoch”, in *Deleuze and Psychoanalysis: Philosophical Essays on Deleuze’s Debate with Psychoanalysis*, Leen De Bolle (ed.), Leuven University Press, 2010, p.107.

文献

- 千葉雅也「彼岸のエコノミー——ドゥルーズ『マゾッホ紹介』再読：デリダ、マラブーのフロイト解釈と比較しつつ」『現代思想』(第36巻第15号)、青土社、2008年
- Gilles Deleuze, “Description of Woman: for a Philosophy of the Sexed Other”, Keith W. Faulkner (trans.), in *Angelaki*, vol.7, no.3, Routledge, 2002.
- , “Statement and Profiles”, Keith W. Faulkner (trans.), in *Angelaki*, vol.8, no.3, Routledge, 2003.
- , « A quio reconnaît-on le structuralisme ? », in *L’île déserte et autres textes. Textes et entretiens 1953-1974*, Minuit, 2002.
- , *Présentation de Sacher-Masoch*, Minuit, 1967.
- , *Logique du sens*, Minuit, 1969.
- Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Mille Plateaux, capitalisme et schizophrénie 2*, Minuit, 1980.
- Bruce Fink, *The Lacanian Subject: Between Language and Jouissance*, Princeton University Press, 1995
- ブルース・フィンク『臨床ラカン派精神分析入門——理論と技法』中西之信、椿田貴史、舟木徹男、信友建志訳、誠信書房、2008年
- Sigmund Freud, *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, James Strachey (trans. and ed.), Hogarth Press.
- Tomas Geysken, “Literature as Symptomatology: Gilles Deleuze on Sacher-Masoch”, in *Deleuze and Psychoanalysis: Philosophical Essays on Deleuze’s Debate with Psychoanalysis*, Leen De Bolle (ed.), Leuven University Press, 2010.
- Melanie Klein, *The Psychoanalysis of Children*, Vintage Classics, 1997 [1932].
- , “Notes on Some Schizoid Mechanisms”, in *Envy and Gratitude*, Vintage Classics, 1997 [1957].
- Jacques Lacan, *Le séminaire, livre III: Les psychoses, 1955-1956*, Jacques-Alain Miller (ed.), Seuil, 1981
- , *Le séminaire, livre V: Les formations de l’inconscient, 1957-1958*, Jacques-Alain Miller (ed.), Seuil, 1998.

Jean Laplanche et J.-B. Pontalis, *Vocabulaire de la psychanalyse*, PUF, 2007 [1967].

小倉拓也「ドゥルーズ哲学における「他者」の問題」『フランス哲学・思想研究』(第16号)、日仏哲学会、2011年。

Anne Sauvagnargues, *Deleuze et l'art*, PUF, 2005

Eduard Viveiros de Castro, "Intensive Filiation and Demonic Alliance", in *Deleuzian Intersections: Science, Technology, Anthropology*, Casper Bruun Jensen and Kjetil Rdje (ed.), Berghahn Books, 2009

The Problem of Perversion in Deleuze Its Development and Consequence in the 1960s

Takuya OGURA

Abstract:

Gilles Deleuze intensively discusses “perversion” between the 1940s and 1960s. The concept of “perversion” has seemingly been replaced by that of “schizophrenia” since the 1970s, but in fact it has an irreducible importance and consistently shapes themes throughout his philosophy.

In this paper, I analyze two transcendental attempts in *Présentation de Sacher Masoch* (1967), namely, sadism and masochism, and illuminate the latter as that which opens up the frontiers of the former which tries to go beyond any law and principle. By examining in detail the two notions of “disavowal” and “foreclosure”, with which Deleuze characterizes masochism, and by focusing on their problematic status in psychoanalysis, I will demonstrate that masochism is an attempt that runs counter to any principle of organization, by which even sadism is dismissed. Masochism is in this sense a kind of “this side-beyond.”

Then, through a close reading of *Logique du sens* (1969), it will be revealed that this logic of masochist perversion derives a “body without organs” in such a way that it renounces altogether segmental and persecutory object relations.

Key Words : perversion, disavowal, foreclosure, Body without Organs